

帝王切開と〈女〉の死 —— 『マクベス』の〈謎〉は解かれたか？

加 藤 行 夫

1. はぐらかされた謎解き

やはり問題の発端は、作品を読んでいて、その箇所に来たときに必ず抱き、いかなる解説書によっても払拭できない「心残り」といった感覚だ。『マクベス』のなかでそれを感じるのは、劇の終幕近く、マクダフとの決闘の際に明かされる予言の種明かしについてである。

戴冠してなお不安におびえるマクベスを勇気づけたのは、魔女によって呼び出された幻影が下す2つの予言——「バーナムの森が動くまでは滅びない」、
「女から生まれた者には倒されない」——であった。「森が動く」ことはあり得ず、人はみな「女から生まれ」る以上、この2つは、当然ながらマクベスにとって、「未来永劫」「いかなる者」からも王位は安泰という確約と聞かれる。しかし、意外な謎解き——あまりにも馴染んでしまった顛末のために、それを意外と思う読者（観客）はもはやいないだろうが——は、マルカムの軍勢が（兵力をくらませるために）森の木枝を掲げて進み、マクダフが「時ならずして母の腹から引き出された男」と告げることで明かされる。この第2の予言の謎解きに対する従来の解釈が、どうにも釈然としないのだ。

問題となる部分をまず第一フォリオ版によって原文で見てみよう。

Macb. . . .

I beare a charmed Life, which must not yeeld
To one of woman borne.

Macd. Dispaire thy Charme,
And let the Angell whom thou still hast seru'd
Tell thee, Macduffe was from his Mothers womb
Vntimely ript.

(*Macbeth*, F 1, TLN : 2451-56 ; 2 nd Arden : 5.8.12-16)

「女から生まれる」(“of woman borne”)ということばから、当然ながらマクベスは、そして観客も、この予言がなされた当初、その焦点を「女」(“woman”)に合わせて聞き取っているだろう(だからこそマクベスは安心したのだ)。ところが、実はその予言は、これまでの多くの解釈によれば、「(自然に)生まれる」

(“borne”, 以下現代綴りで “born” と表記)の方に本当のポイントがあり、マクダフは「(人為的に)引き出された」(“Vntimely ript”, 同じく “Untimely ripped” と表記)のであって「生まれ」たのではない、と焦点をずらすことで解決させている。

テキストに付された注釈も、ほとんどがその点で一致し、代表例として、A. W. Verity は、“born” ということばの「本当の力」にマクベスも観客も最後に思い至ると述べる――

At last the real force of born in the fatal couplet becomes clear to Macbeth—and to us: “born naturally, brought forth in the normal manner of childbirth.” (*Macbeth*, edited by A. W. Verity, Cambridge Univ. Press, 1901. p. 154以下, 引用の下線は筆者による)

「時ならずして引き出された」ということは、すなわち「帝王切開」による誕生を意味する――

prematurely delivered (by Caesarean section) (*Macbeth*, edited by Rex Gibson, Cambridge School Shakespeare, Cambridge Univ. Press, 1993. p.152)

つまりは「女から」の方に重点を置いて考えたのは、マクベスの(そして観客の)勝手な誤解ということになる――

torn from his mother's womb before the completion of a nine-month term. Macbeth has interpreted the Witches' prophecy to refer to any man born to an earthly woman (see Matthew 11: 11). But Macduff

gives the prophecy the more restricted sense of “born to full term,” or given birth to in the normal fashion. (*Macbeth*, edited by John F. Andrews, Everyman, J. M. Dent, 1993, p. 178)

ここで参照されている新約聖書の当該箇所は——

Verily I say unto you, Among them that are born of women there hath not risen greater than John the Baptist. (Matthew, 11:11, Authorized Version)

「女から生まれた者」という表現が「万人」を意味すべく同時代の聖書に書かれていればこそ、予言のなかのこぼをマクベスや観客のように理解するのはむしろ当然で、だから謎解きはその裏をかいたのだということになる。そして、学生向けの作品解説書もなべて同一の方向を指し示す——

Macbeth learns that Macduff was taken from his mother's womb early (probably a Caesarean birth) and therefore she did not bear him in the natural way. (*Macbeth*, guide written by Stewart Martin, A Letts Literature Guide, Aldine House, 1994, p. 56)

His [Macbeth's] confidence entirely evaporates when Macduff informs him that he was not “born,” but delivered through a Caesarean operation. (*Macbeth*, Noes by James Sale, Nork Notes, Longman, 1997. p.62)

ただひとつ、以下の注釈が「帝王切開」をさらに詳述して、興味深い事実注意到を喚起してくれている——

i.e. born by Caesarean section. Having to choose, early modern medical practitioners sought to save the baby rather than the mother; Caesarean section always killed the mother. See the popular guide for physicians and midwives, Eucharius Roesslin, *The Birth of Mankynde*, trans. And enlarged by Thomas Raynald (1565), sig. Psr,

and p. 22 above. (*Macbeth*, ed. By A. R. Braunmuller. Cambridge Univ. Press, 1997. p. 234.)

「帝王切開」によって「常に母は死んだ」とのことで、(注釈者 Braunmuller が何のためにそれを言ったのか不明瞭だが) この点については、あとの議論でまた戻らなければならない。

微妙なことばの選択に解釈者としての立場がうかがい知れる日本の翻訳も通観しておこう。

[坪内逍遙]

マクベ 俺の生命 (いのち) には呪 (まじな) ひがしてあるから、女に生み落とされた男なんかにゃ、やっつけられる虞 (おそ) れはないのだ。

マクダ その呪ひは駄目だと思へ。汝が常住 (ふだん) 信仰してゐる守神に聞き直して来い、マクダッフは、其母の腹を裂いて、生まれる前に取出された人間だぞ。

「生まれる前に」ということばをあえて補って、「生み落とされた」と明瞭な対比を試みているのは、基本的に上記の注釈者たちと同じ解釈によるからであろう。

[木下順二]

マクベス おれの命にはまじないがかかっているのだ、女の腹から生れた奴には決してやられんという。

マクダフ あきらめろ、そんなまじない、
きさまが大事に仕えてきたらしい悪魔の手先どもに
お伺いをたてるがいい、そのマクダフは母の腹を
裂いて月足らずで生れたのだ。

「腹から生れた」と「腹を裂いて月足らずで生れた」との対比が坪内訳と同様に意図されている。しかし、この2つの句がともに「生れた」で終わっていて、『マクベス』をこの翻訳で初めて知る読者(観客)に、そもそもこれが謎解きになっていると了解させることは可能なのだろうか。なお、「腹を裂いて月足らずで生れた」という文の主語がマクダフであれば、彼はみずから母の腹を(な

かから）裂いて出てきたことになる。原文はそうになっていない（“ripped”という受動態）ので誤訳には違いないが、それはそれでおもしろい解釈の余地を示している。

[福田恆存]

マクベス その手に負える相手をねえ、おれの命はまじないつきだ、女から生れた人間には手につけられないのだぞ。

マクダフ ふむ、そんなまじないの効きめ、いつまで続くものか、もうだめだぞ。貴様が大事に奉っている悪魔の手先に、もう一度うかがいをたててみる、このマクダフは生まれるさきに、月たらずで、母の胎内からひきずりだされた男だぞ。

坪内訳と同じで、「ひきずりだされた」という表現に生々しい異常な出産が印象づけられている。

[野上豊一郎]

マクベス おれの命には魔法がかかっていて、女から生れた奴の手にはかからないのだぞ。

マクダフ その魔法はあきらめろ。

貴様が仕えてる守神にでも聞いて見ろ。

マクダフはおふくろの腹を切り裂いて
生れぬ先に出て来たんだ。

「切り裂いて」「出て来た」という主体的な動きは木下訳の解釈をさらに強調したもので、赤子でありながら早くも血気盛んな、そして神がかり的な意志が意図されている。

[氷川玲二]

マクベス わしは不死身だ。女が生んだ男には破れぬ呪文がかかっておる。

マクダフ 観念しろ。呪文は切れた。貴様をあやつる悪魔にきいてみるがいい。このマクダフは月たらずで、母の腹を破いて取りだされた男だ。

坪内訳と同じで、「女が生んだ男」と「女」と「男」の対比を訳し出している

点もすでに坪内訳にあったものだ。「(男より劣った)女ごときから生まれた」という意味を読むわけだが、これも無視できない重要な解釈を含んでいる。

[小田島雄志]

マクベス おれのいのちは
まじないがかかっている、不死身なのだ、
女から生まれたやつにたいしては。
マクダフ そんなまじないは
絶望の淵に捨てるのだな。きさまがあがめる悪魔の手先に
もう一度聞いてみろ。マクダフは女から生まれる前に、
月たらずのまま母の腹を裂いて出てきたと言うだろう。

「裂いて出てきた」という意志を読む点で、木下訳、野上訳に通じる。「時ならずして」(“Untimely”)を「月たらずのまま」ととるのも(「帝王切開」は「月遅れ」の場合もあるはずだが)、この世への登場を逸る気持ちを斟酌してのことだろう。

[大山俊一]

マクベス 俺の命には魔法がかかっている。女から産まれた男に
屈服することは絶対にあり得ないのだ。
マクダフ その魔法も絶望だぞ。
お前が日ごろつかえてきた悪の天使に訊ねてみるがよい、
マクダフは母親の腹から時ならずして切開手術、
摘出された*のだと教えてくれるわ!

「切開手術」「摘出」ということばで医学的なニュアンスを表出させて、出産が「帝王切開」だったことを強調する。さらに*印の箇所以下に以下の注釈が加えられている――

帝王切開で産まれたマクダフは「自然に」、「ふつうの意味で」
産まれたのではない。二幕三場の「ほかし屋」の技術参照。この
行半行――おどろき、あきれるマクベスは直ちにはセリフを続け
られない。

[松岡和子]

マクベス 俺の命には魔力がかかっている。女から生まれたやつには
屈伏しない。

マクダフ 観念しろ、魔力は切れた。

貴様が崇める悪魔の手先に

言ってもらえ、マクダフは月足らずのまま

母の腹を破って出てきた*、とな。

この*印にも「帝王切開による誕生だということ」という注釈が付されている。原文をあえて逸脱して「腹を破って出てきた」という訳がここでも採られているのは、「自然分娩」と「帝王切開」の対比以上に、赤子の意志的な出産を印象づけたい訳者の解釈の（無意識の？）表われと見てよいだろう。

ということは、立ち入って考えれば、このように訳さざるを得なかった翻訳者たちにとっても、最後の謎解きを単に「帝王切開」だったから、と言うだけでは納得できない部分があったのではないか。つまり、魔女によるマクベスの呪縛を一挙に断ち切る何らかの力の顕現を、この最後の謎解きに読み取りたかったのではないだろうか。ただ、この解釈の唯一最大の難点は、原文にそう書かれていないということだ。

従来、この謎解きのたわいのなさは、どのように納得させられてきたか。たとえば木下順二は——

帝王切開だったというのです。それでマクベスはがっくりとくる。子どもだましみたいな話だけれども、狂乱状態に陥って、敵から攻めたてられて、今や人間でなくなっているマクベスとすると、あれらの予言、ばかばかしい話が無理なく信じられてしまうわけです。（木下順二、『「マクベス」をよむ』、岩波ブックレット、岩波書店、1991、p. 37）

「子どもだましみたいな話」をマクベスが信じてしまうのは彼が動転しているからだ、という典型的な心理主義で解決しようとしている。しかし、仮にここで言われるように「子どもだましみたいな話」と「マクベスの動転」とが観客にはっきり意識化できているとするなら、この謎解きの説得はだれよりも観客に対しては成功していないことになる。この最後の決着は、そうではなく、マクベスの落胆であると同時に、観客にとっても思わぬ（しかし確かな）「正解」

でなければならないだろう。

問題の予言は、厳密には、3人の幻影によって3つのことが告げられた。1.「マクダフに気をつけろ」、2.「女から生まれた者には」、3.「バーナムの森が動くまで」、とこの順序で語られ、謎解きは「バーナムの森」から逆の順序で実現して行く。バーナムの森で軍勢を指揮しているのは前王の嫡子マルカムだが、彼を逃亡先から決起させたのがマクダフであることを思えば、これら3つはすべてが（そして3から1に至るにつれてより明瞭に）「マクダフの脅威」を予告している。森が動くのは、だから、マクベスにとって、いわば外堀が埋められたことになり、そして最後の明示的予言「マクダフ」に倒される一步手前で守る重要な内堀こそ、「女から生まれた者」の予言であったはずだ。つまり、森が動くという謎解きが幾分たわいのないものであっても、マクベスの意識にとっては不動の城壁であった「女から」の謎解きが、かくもあっけない「だまし」でしかなかったとしたら、観客は（すでに魔女の「二枚舌」“equivocation”には十分覚悟をしていても）本当には説得されないのではないか。

これが悲劇の大団円にふさわしい謎解きとして成立するには、もっと確かなところで、それも即座に納得される理由が必要なのではないか。あるいは、ここには当時の観客に暗黙のうちに了解された何らかのサブテキストがあるのではないか。それが明示的にテキスト化されていない分だけ、いっそう深く合点せざるを得ない何か。

2. 材源を求めて

『マクベス』の書かれた時代、そもそも「帝王切開」とは何だったのか。本稿の関心は結局ここまで戻らざるを得ないが、その前に、問題の原文をそのサブテキストとあわせて再度読み直してみよう。

H.H. ファーネスは、集注版『マクベス』の当該箇所にはウェリギリウスの『アエネーイス』を引用している――

Inde Lichan ferit, exsectum jam matre perempta/Et tibi, Phoebe, sacrum. (Virgil, *Aen.*, X. 315, A New Variorum edition of Shakespeare: *Macbeth*, ed. by Horace Howard Furness Jr., New York: Dover, 1963)

これを含む前後の英訳は――

Aeneas next kills Lichas, who had been cut out of his dead mother's womb and then made sacred, Phoebus, unto you, because you let his infant life escape that knife. (*The Aeneid of Virgil*, trans. Allen Mandelbaum. Univ. of California Press, 1982)

「アエネーイスは次にリカスを殺す。リカスという男は、死んだ（“perempta”）母の体内より切り出された者。（医学の神）アポロよ、つらぬく刃からこの幼き命を逃れさせた（無事に生まれさせた）がゆえ、この子を汝に捧げよう」という意味だが、ここでも確認しておきたいのは、「帝王切開」がすでに医学的処置として行なわれていたらしいという事実にもまして、それは「母の死」とともにあったということだ。関連して、母の身体を切り開く刃をくぐり抜けて生まれてきた子供に対する一種の聖化意識がある点も見逃すことはできない。『アエネーイス』の別の注釈書には「母の死」と「聖化」に関するセルヴィウスのことばが紹介されている——

Servius tells us that all children born by Caesarean operation after the death of their mothers were consecrated to Apollo, god of medicine. (R. D. Williams, ed. *The Aeneid of Virgil*. St Martin's Press, 1973. p. 343; cf. Georg Thilo and Hermann Hagen, eds. *Servii Grammatici qui feruntur in Vergilii carmina commentarii*. vol.II. Lipsiae, 1884; Georg Olms, 1986)

アーデン版第2版もファーンエスの集注版を引きながら、シェイクスピアはウェリギリウスのこの箇所を読んでいたかもしれないと述べてつつ、しかし、むしろ依っていたのはホリンシェッドによる『英国年代記』の方であっただろうとして、次の部分を引用する——

...where Makbeth perceiving that Makduffe was hard at his backe, leapt beside his horsse, saing; Thou traitor, what meaneth it that thou shouldest thus in vaine follow me that am not appointed to be slaine by anie creature that is borne of a woman, come on therefore, and receive thy reward which thou hast deserved for thy paines, and therwithall he lifted up his swoord thinking to have slaine him. But

Makduffe quicklie avoiding from his horsse, yer he came at him, answered (with his naked sword in his hand) saieng: It is true Makbeth, and now shall thine insatiable crueltie have an end, for I am even he that thy wizzards have told thee of, who was never borne of my mother, but ripped out of her wombe: therewithall he stept unto him, and slue him in the place. (Appendix A, p. 179. *Macbeth*, 2nd Arden, ed. Kenneth Muir)

シェイクスピアの『マクベス』では幻影によってなされた予言が、この材源では魔女によるとされているという点を除けば、表現形式はほぼ忠実に踏まえられている。「生まれたのではなく、引き出された」というホリンシェッドの対比構文が、『マクベス』において、“born”と終えたマクベスの詩行と“ripped”で終えるマクダフの詩行との対比によって実現させられている。その限り、材源の文体は従来解釈を指示することになる。しかし、マクダフがそう言うてすぐに「彼〔マクベス〕に飛びかかり、殺した」と、マクベスの（マクダフの種明かしに対する）反応にいっさい触れないホリンシェッドの物語方法は、近代的なリアリズムにはほど遠い、かなりの部分の「省略」によって成り立っていると言ってよいだろう。つまり、ホリンシェッドの語りにはさらにサブテキストがあり、言わずもがなのことを読者の当然の理解に委ねていると考えるべきではないか。やはり「帝王切開」に内包されている同時代の理解が問題になる。

3. 歴史のなかの「帝王切開」

自然の生理的産道を通過することなく子宮壁を切開して胎児を娩出させる「帝王切開」(cesarean section)は、俗に古代ローマのジュリアス・シーザーが子宮切開によって生まれたことから命名された(sectio caesarea)とする説が強いが、「sectioが〈切開〉の意でcaesareaも〈切られたもの〉を意味するところから、〈切る〉の重複語とする説も有力である」(平凡社『世界大百科事典』)。シーザー起源説については、もう少し複雑な事情が関係しているのだが、それは後述する。そもそも、いつから「帝王切開」はあるのか。「この方法は紀元前715年のローマ法集成中に含まれており(lex caesarea)、母親生存の場合は胎児救出法として、死亡の場合は分離埋葬の用意の一つであった」(『廣川・

ドーランド図説医学大辞典』) という解説に従って、「ローマ法集成」にあたってみると、「ヌマ・ポンピリウス」の「王法」にそれらしい記述がある——

懐妊中に死亡せる婦女はその妊婦より胎児が切開して取り出される以前には是を埋葬するを王法は拒否し、此の法に反対せる者は妊婦の中に宿れる胎児を生かさんとする希望を放棄せるものとみなされる。(『西洋法制史料選Ⅰ 古代』(久保正幡先生還暦記念出版準備会編、創文社、1981. p. 6)

「Leges Regiae (王法) とは、勿論古代ローマに於ける王法を総称して言う。」「今日王法として知られているものは、主として Plutarchus (46-120?), Dionysius de Halicarnasso (キリストと同時代) の二人のギリシア語による歴史書の中、ローマ王政に関する伝説的説明の中で、後にラテンの文献学者が検討して、意見の一致せる処の断片が中心として認められ、他にラテンの文献学者の労作を少しく附加したものである」(前掲書, pp. 16-17) とのことで、「ロムルス」の「王法」を最初として、次にこれが挙がっている。しかし、ここで述べられている「切開」は、いわゆる「帝王切開」ではなく、死んだ母親の胎内に宿る赤子を救出する法律で、いわば(赤子を見殺しにする)殺人罪の可能性について言及したものだ。ただ、以下の議論に関連する事実として留意すべきは、「死亡せる婦女」に対して「切開」がなされたという点である。「古代エジプト、ユダヤでは妊婦が死亡したとき腹壁より胎児を娩出させ、埋葬する風習がある」(武見『医科学大事典』)という記載でも「死」が言及されている。

ところで、当時の女性の地位を端的にうかがわせるものとして、「ロムルス」の「王法」に以下の記述がある——

婦女が罪を犯したる場合、その被害者として審判人たらしめて刑罰の輕重を裁定せしめた。然して、妻が姦通したる関係人のある場合及び妻が葡萄酒を飲みたるを発見せられたる場合、以上二つの場合は夫の血族者が取り調べたる処であつた。且つ實にロムルスは此等の両方の場合に付いて、婦女の犯罪の中最極なるものとして刑罰を課すを許容せり。蓋し、彼は姦通を自暴自棄の起始とし、酩酊を姦通の起始と判断せし故に。(同上)

「婦女の犯罪の中最極なる」という「姦通」が「葡萄酒」を飲むことと同罪であつたという事実は興味深い。古代における「帝王切開」の実態を考えると、

この著しい女性蔑視が無関係とはならないだろう。

医学の発達した現代では、「帝王切開」は、母の生命も赤子の生命も同時に救うことを当然の目的としている。しかし、起源の時代ではどうだったか――

The first documented cesarean section on a living woman was performed in 1610; she died 25 days after the surgery. Abdominal delivery was subsequently tried in many ways and under many conditions, but it almost invariably resulted in the death of the mother from sepsis or hemorrhage. (Britannica CD 97)

これによると、生きている女性に「帝王切開」が試みられたのは1610年が初めてということだが（しかし、いつが最初かについては諸説あって、確かなことはわからない）、この時代では、出血多量による母の死が必然的な結果であった。それは医学的な未熟さゆえだったのはもちろんとして、出産に苦しむ女の生命の救出がもとより意図されていたかどうか自体が疑わしいのだ。

本手術はヨーロッパでは Trautmann (1610) が、本邦では1641年（寛永18）に行われた史実がある（岡島：《西海医報》165号）。本手術は Semmelweiss (1818～65), Lister (1827～1912) らが制菌法を開発したあとも他の開腹術にくらべ予後が悪く、母体死亡の原因は子宮収縮不良、悪露滞留、切開創の破裂などで起こる出血、感染、ショック死である。（武見『医科学大事典』）

母胎の生命の危険性はさらに強調される――

The operation constitutes major surgery, and, compared to the risks of normal vaginal delivery, it is more dangerous for the mother. The risk of other complications—such as infection, hemorrhage, blood clots, and injury to the bladder or intestines—is also greater. (Britannica CD 97)

「帝王切開」に関係する中世ヨーロッパの医学の歴史を簡単に振り返ると（藤

井『世界医学年表』および Porter, *Cambridge Illustrated History of Medicine* による), 15世紀, ある画家(彫刻家)が人体解剖により筋肉構造を精査し, 1490年, ガレノスの著作がラテン語で紹介され, 1508年, レオナルド・ダ・ヴィンチが人体解剖図を描き, 1540年, イギリス理髪師外科医連合(The companies of Barbers and Surgeons)が結成され, ようやく専門家としての医者が明確化された(とは言っても理髪師と同列だが)。しかし, 1580-84年, ロンドンにペストが大流行, という時代であった。後に「麻酔の父」と呼ばれるウィリアム・モートンが初めて麻酔薬にエーテルを使用したのが, ようやく1846年であった。

Even in the first half of the 19th century, the recorded mortality was about 75 percent, and fetal craniotomy—in which the life of the child is sacrificed to save that of the mother—was usually preferred.(Britannica CD 97)

19世紀に入っても「帝王切開」による母親の死亡率は75パーセント, しかし, このころになってようやく母の方を救う意識が芽生える。要するに, シェイクスピアが『マクベス』を書いたころ, 医学という点では甚だしく遅れていた時代のなかで, 「帝王切開」という大手術が母の生命を救うという意味では, まったく成功すべくもなかったのだ。

4. 古来「女」とは？

古代ギリシア・ラテンの時代, そもそも「女」はどのようなものとして理解されていたのだろうか。「医学と哲学に関して膨大な著作を残し, 当時の医学知識をすべて集めて, のちのギリシア, ローマの医学書の著者から典拠として利用される」(『岩波=ケンブリッジ・世界人名辞典』)というガレノス(Claudius Galenus, 130頃-201)の記述——

The female is less perfect than the male for one principal reason because she is colder, for if among animals the warm one is the more active, a colder anima would be less perfect than a warmer.

All the parts, then, that men have, women have too, the difference between them lying in only one thing, which must be kept in mind throughout the discussion, namely, that in women the parts are within [the body], whereas in men they are outside, in the region called the perineum.

If this should happen, the scrotum would necessarily take the place of the uteri, with the testes lying outside, next to it on either side ; the penis of the male would become the neck of the cavity that had been formed ; and the skin at the end of the penis, now called the prepuce, would become the female pudendum [the vagina] itself.

The mole's eyes, however, do not open, nor do they project but are left there imperfect and remain like the eyes of other animals when these are still in the uterus .../So too the woman is less perfect than the man in respect to the generative parts.

Thus, from one principle devised by the creator in his wisdom, that principle in accordance with which the female has been made less perfect than the male, have stemmed all these things useful for the generation of the animal : that the parts of the female cannot escape to the outside ; that she accumulates an excess of useful nutriment and has imperfect semen and a hollow instrument to receive the perfect semen

Moreover, if this has been demonstrated and it has been granted that the male is warmer than the female, it is no longer at all unreasonable to say that the parts on the right produce males and those on the left, females. (Comparison of male and female anatomy. Pergamum, 2nd cent. A.D. ; Galen, "On the Usefulness of the Parts of the Body" 14.6-7, exc. Tr. M.T. May. G) { [HYPERLINK http://www, http://www}. uky.edu/ArtsSciences/Classics/wlgr/wlgr-medicine 351. html](http://www.uky.edu/ArtsSciences/Classics/wlgr/wlgr-medicine351.html)

これらを簡潔にまとめると——「女」は男の不完全なもので、性器の作りは各部分ともすべて同じだが、「女」のそれが身体の内部に入っている点でのみ異なる。「女」の睾丸でできる精子も不完全なものだから、完全な男の精子を受け入れて育てることになる。男の右側の「優れた」睾丸で作られた精子は男になり、左側の「劣った」睾丸からは「女」が生まれる。

「女」の性器が男の反転物という発想の根源はアリストテレスにありそうだ

女性の陰部は男性とは反対にできている。すなわち恥丘の下はくぼんでいて、男性の場合のように突き出てはいない。（『動物誌』第1巻、第14章）

また、「女」にも睾丸があるという考えは、アレクサンドリアの解剖学校の創立者ヘロフィロス（Herophilos, 前335頃-前280頃）に元を発する——

ヘロピロスが睾丸をディディモス（羅 *didimus*）と命名したことを、ガレノスは「身体各部の役割について」の中に記しています。アリストテレスの著作には「睾丸」（オルケイス）の記述はあるが「卵巣」の直接の記載がなく、卵巣と卵管を初めて記載したのはヘロピロスとされていますが、彼は卵巣を「女の睾丸」（羅 *testes foeminae*）と呼び、ガレノスも上述のようにこれを踏襲しています。」（二宮, p. 299）

かくも「劣った」「不完全」な「女」は、優れた男の精子のためにひとえに奉仕する受容体、いわば畑でしかなかった。その「女」が出産に際して「帝王切開」を受けるとき、おのずと待っていたのは、用済みになって脱ぎ捨て去られた抜け殻、つまり「死」なのである。

5. 「女」の死

中世・ルネサンスの時代の貴重な文献として、現代外科学の父と称されるフランスのアンプロワーズ・パレ（Ambroise Paré, 1510頃-90）の記録がある

帝王切開は母親（母体）の死後に行なうべし。……帝王切開を受けて存

命している女性がいるという噂も聞いたことがあるが、そういう女性に自分が実際に出くわしたことはない。……生きている女性に帝王切開を施すべきではない。」(著作集の英訳 “Concerning the Generation of Man”, 1634, p. 923より)

これに基づいて、「帝王切開」における「女」の必然としての死が再確認されてゆく――

[I]t must be assumed that they [caesarian sections] were only performed in an emergency, when the mother was dying and a desperate attempt was made to save the life of the baby. There is little firm evidence of mothers surviving caesarians until the nineteenth century. (Porter, *Cambridge Illustrated History of Medicine*. Cambridge Univ. Press, 1996. p.208)

6. 試訳 ―― 結論に代えて

ここでわれわれは、ようやく『マクベス』の謎解きの問題に戻ることができ、Braunmuller が付した注釈 (“Caesarean section always killed the mother”) の真意を理解することができる。マクダフが「帝王切開」によって生まれたということばには、言わずもがなのこととして「女の死」が内包されているのだ。そして、この「女」と「女の死」をめぐって展開される有名な謎かけとえば、『ハムレット』の最終幕、主人公と墓堀りとの対話が即座に思い起こされよう。

Ham. What man dost thou digge it for?

Clo. For no man Sir.

Ham. What woman then?

Clo. For none neither.

Ham. Who is to be buried in't?

Clo. One that was a woman Sir ; but rest her Soule,
shee's dead.

(*Hamlet*, F 1, TLN : 3321-27 ; Oxford edition : 5.1.126-132)

...so that a sound Caesarean nativity may outlast a natural birth, and

a knife may sometimes make way for a more lasting fruit than a mid-wife ; which makes so few infants now able to endure the old test of the river. (Sir Thomas Browne. *Religio Medici, Hydriotaphia, and the Letter to a Friend*, 1635?)

すでに見た『アエネーイス』にもこれに類する表現があったが、切り裂く刃を逃れて生まれてきた赤子は、それゆえ強運で優れた特性を有する、というものだ。この「聖化」意識をもとに Blumenfeld-Kosinski は、「帝王切開」による英雄ジュリアス・シーザー誕生の図版を解説し、しかし同時に、反キリスト (Antichrist, cf. 1 JOHN 2 : 18-19) の誕生図の併存も指摘している。母の腹に突き刺される刃の、わずかな位置の差で赤子の生と死が決定されるという事実から、「帝王切開」の両義性が生じる次第だ。聖なる者か悪魔か、どちらかが生まれる。そう考えてみれば、最後の決戦において、魔女の申し子とも言うべきマクベスに対して、マクダフが同等以上の力を備えていると了解されるためにも、「帝王切開」による誕生は必須の条件だったことになる。ちなみに、この Blumenfeld-Kosinski も、本稿で扱った謎解きの真意について筆者と同じ解釈をしている。

Cut out of the womb, or by “untimely ripp’d” as Shakespeare put it in *Macbeth* (act 5, scene 8), the newborn was the child not of a living woman but of a corpse. (Introduction, p.1)

8. 参考文献

本稿を執筆するにあたり、秋山学氏（筑波大学）からはギリシア・ラテンの文献等について、小沢博氏（東北大学）からは Paré の資料について、吉原ゆかり氏（筑紫女学園大学）からは Blumenfeld-Kosinski および Loughlin の研究書について教示された。また、草稿を口頭発表した土曜文学談話会において、斎藤衛氏（武庫川女子大学）ははじめ多くの方より貴重な示唆を与えられた。

Adelman, Janet. *Suffocating Mothers : Fantasies of Maternal Origin in Shakespeare's Plays, Hamlet to The Tempest*. Routledge, 1992.
アリストテレス『動物誌(上)』(アリストテレス全集 7) 島崎三郎訳, 岩波書店, 1968.

- Blumenfeld-Kosinski, Renate. *Not of Woman Born: Representations of Caesarean Birth in Medieval and Renaissance Culture*. Cornell Univ. Press, 1990.
(中世の「帝王切開」の図版多数)
- Britannica CD-ROM, 1997.
- Churchill, Helen. *Caesarean Birth: Experience, Practice & History*. Butterworth, 1997.
- Davis, Lloyd. and Waddington, Raymond. *Sexuality and Gender in the English Renaissance: An Annotated Edition of Contemporary Documents*. Garland, 1998.
- Dorland ドーランド医学大辞典編集委員会『廣川・ドーランド図説医学大辞典』第28版, 廣川書店, 1997
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*, 3rd ed. Routledge, 1989.
- 藤井尚治『世界医学年表』科学新聞社, 1980
- 後藤 稔, 他『最新医学大辞典』第2版, 医歯薬出版, 1996
- 平凡社『世界大百科事典』CD-ROM
- 岩波『岩波=ケンブリッジ・世界人名辞典』CD-ROM, 1998.
- Loughlin, Marie H. *Hymeneutics: Interpreting Virginity on the Early Modern Stage*. Associated Univ. Press, 1997.(女性の身体の解剖図版あり)
- 三木 栄, 阿知波五郎『人類医学年表』思文閣出版, 1981.
- 二宮陸雄『ガレノス・靈魂の解剖学』平河出版社, 1993.
- Porter, Roy. *Disease, Medicine and Society in England, 1550-1860*, Second Edition. Cambridge Univ. Press, 1995.
- Porter, Roy. Ed. *Cambridge Illustrated History of Medicine*. Cambridge Univ. Press, 1996.
- Siraisi, Nancy G. *The Clock and the Mirror: Girolamo Cardano and Renaissance Medicine*. Princeton Univ. Press, 1997.
- 武見太郎他編『医科学大事典』講談社, 1983.
- Turner. James Grantham. Ed. *Sexuality and Gender in Early Modern Europe: Institutions, Texts, Image*. Cambridge Univ. Press, 1993.

以下はインターネットで公開されている古代の医学文献およびテーマ別関連リスト
(画像あり)

On Medicine and Anatomy in Greek and Latin

<http://www.uky.edu/ArtsSciences/Classics/wlgr/wlgr-medicine.html>

The female role in generation. Athens, 4 th cent. B.C.

(Aristotle, *On the Generation of Animals*, 716 a 5-23, 727 a 2-30, 727 b 31-33, 728 b 18-31, 765 b 8-20, 766 a1 7-30, 783 b 26-784 a1 2. Tr. A.L. Peck, LCL. G)

Intercourse, conception and pregnancy. Cos, 4 th cent. B.C.

(Hippocrates, *On the Generating Seed and the Nature of the Child* 4-7, 13,

- 30.4 = VII.474-80, 488-92, 536-8 Littre. Tr. I.M. Lonie. G)
- Women's illnesses. Cos, 4 th cent. B.C.
- (Hippocrates, *Diseases of Women* 1.1, 2, 6, 7, 21, 25, 33, 62 exc. = VIII.12-22, 30-4, 60-2, 64-8, 78, 126 Littre. Tr. A. Hanson. G)
- Displacement of the womb
- (Hippocrates, *Places in Human Anatomy* 47 = V 344-6 Littre. G)
- Hysterical suffocation.
- (Hippocrates, *Diseases of Women* 2.126, 123 = VIII 271-3, 266 Littre. G)
- Dislocation of the womb.
- (Hippocrates, *Nature of Women* 8, 3 = VII 322-4, 314-6 Littre. G)
- The dangerous first and sixth 40-day periods during pregnancy.
- (Hippocrates, *On the Seventh-Month Child* 3-4 = VII 438-42 Littre. G)
- Hysteria in virgins.
- (Hippocrates, *On Virgins* = VIII.466-70 Littre. G)
- Comparison of male and female anatomy. Pergamum, 2 nd cent. A.D.
- (Galen, *On the Usefulness of the Parts of the Body* 14.6-7, exc. Tr. M.T. May. G)
- Psychological origins of hysteria. Pergamum, 2 nd cent. A.D.
- (Galen, *On Prognosis* 6. Tr. A J. Brock. G)
- Menstruation, conception, contraception and abortion. Rome, 1 st cent. A. D.
- (Soranus, *Gynaecology* 1.24, 26, 34, 36, 39, 40, 60, 61, 64. Tr. O. Temkin. G)
- Childbirth: instructions for the midwife. Rome, 1 st cent. A.D.
- (Soranus, *Gynaecology* 1.67-9, exc. L)
- The women of Miletus (a traditional story).
- (Plutarch, *The Bravery of Women* 11, *Moralia* 249 b-d, 2 nd cent. A.D. G)
- Side effects of menstruation. Rome, 1 st cent. A.D.
- (Pliny the Elder, *Natural History* 28. 23, exc. L)
- Clitoridectomy. Roman Egypt, sixth cent. A.D.
- (Aetius 16. 115, G)
- Qualities and training of midwives. Rome, 2 nd cent. A.D.
- (Soranus, *Gynaecology* 1.3-4, abridged. Tr. O. Temkin)
- Advice on hiring a wet-nurse. Rome, 1 st cent. A.D.
- (Soranus, *Gynaecology* 2.18-20. Tr. O. Temkin. L)
- Two contracts for the services of wet nurses for slave children.
- Alexandria, 13 B.C. (BGU 4.1106, 1107. G)
- {HYPERLINK http://www.english.upenn.edu/~bushnell/english-330/materials/new_family/crooke_fem_640_x-g_4.jpeg, http://www.english.upenn.edu/~bushnell/english-330/materials/new_family/crooke_fem_640_x-g_4.jpeg}